

自分にできること

日本が大変なことになりました。そんな日本を背に、3月25日から4月3日まで、ネパールに行っていました。成田からバンコク、カトマンズ、ポカラへと飛んでいる間も、27日ナヤプールからゴラパニ、タトパニへと歩いている間も、ずっと日本がどうなっているか、心配しながら歩いていました。

バンコクの空港には、日本支援の募金箱が置かれていましたし、トレッキング中、イスラエルから来たという若者から、津波と原発を「心配している」、というメッセージを送られました。世界の目が日本に向けられていることを、実感しました。

3日、成田に戻ってニュースを聞くと、原発の状況はさらに悪化していることを知らされて、がっかり。

家に戻って新聞を広げると、「『自粛ムード』論評続々」と題した記事が目にとまりました。三社祭も中止、東京湾大華火大会も中止、「週刊新潮」4月7日号の特集タイトルは、「『自粛自粛』で日本が減ばないか！」であったそうです。

記事には、「このところの自粛ムードはいささか過剰との印象を免れない。イベント中止ではなく、復興支援と銘打って、収益の一部を寄付したらよいではないか」とあった、同感。続けて、「自粛ムードは、『不謹慎』と非難されることを避けたいという集団心理によるものではないか」と指摘。劇作家の鴻上尚史さんは、SPA!のコラムに「『世間』が強くなることで、『不謹慎』の強制力が増すのは、とても困ったことだと思います」と、書かれている、同感。

翻って自分のこと、自分に何ができるか考えてみました。明るく元気なだけを取り柄の岩崎も、さすがに今回は暗くなりました。それで気がつきました。皆んな自粛してるんじゃないんで、元気がなくなっちゃって活動できないんでいるんだ、ってこと。誰かが旗振って、「元気出そうぜ」って呼び掛ければ、皆んな活動を再開するはずです。そうか、誰かじゃなくて、自分が旗振ればいいんじゃないかと、思い至りました。

各分野でそんな旗振りは、すでに始まっています。ぼくも元気出して、旗振り開始。ぼくらの旗は、「パハル」です。パハルとは、ネパール語で「たおやかな山」、を意味します。「歩いて健康・登って元気」、元気出して山に登れば、元気が百倍になって返ってきます。その元気をなんらかの形にして、被災地復興に充てることを考えようではありませんか。

3月11日日以前から、「パハル・フェスタ 九重」についてはご案内していましたが、改めてご注目頂きたいと思います。会場には募金箱を置きたいと考えています。応援メッセージも頂きたいと思っています。額の多寡は問題ではありません。集まったお金に応援メッセージを付けて、被災地に届けたいと思います。

4月29日、「パハル・フェスタ in 九重」に集合！